

2024年度 埼玉医科大学短期大学
学校推薦型選抜 A日程
小論文（看護学科）

次の文章を読み、内容を150字以内に要約しなさい。また、この文章に対するあなたの意見を300字以内で述べなさい。

私は先頃、新聞に載っていた読者のある投書を見て、驚きました。それは21歳の男子大学生による「読書はしないといけないものなのか？」ということを問うた内容のものでした。(中略) 最近「一日の読書時間が『0分』の大学生が約5割に上がる」という調査結果が報告され、それに対して懸念の声が方々からあがりました。この大学生はそれについて「異議あり」の声をあげたのです。大学生曰く、「読書が生きる上での糧になると感じたことはない。読書はスポーツと同じように趣味の範囲であって、自分にとってはアルバイトや大学の勉強の方が必要」だそうです。もし、その大学生が直接、私にそんなことを聞いてきたら、こう答えると思います。「読む、読まないは君の自由なんだから、本なんて読まなくていいよ」そもそも、誰がその大学生に本を読めと強制しているのでしょうか。読まなくても本人の勝手です。読書をしないう若者が増えたと嘆く大人の声など無視し、意義を感じているアルバイトや勉強に今日も明日も精を出せばいいのです。

しかし読書の楽しみを知っている人にはわかります。本を読むことがどれだけ多くのものを与えてくれるかを。考える力、想像する力、感じる力、無尽蔵の知識や知恵……読書はその人の知的好奇心、そして「生きていく力」を培ってくれます。それなりに本を読んでいる人にとって、本が一冊もない人生など考えられないはずです。本なんて読まなくてもいい……。読書の必要性をどう考えようと自由です。しかし、そう思う人は気づかないところで、とても大きなものを失っているかもしれません。

政治にしても経済にしても文化にしても、そこに携わっている人たちの言葉が軽くなっている。じっくりと洞察し、深く考えたところから発した言葉に触れる機会が、以前よりぐんと減っているのを感じます。このことは現代人の読書時間が極端に減ってきていることと、けっして無関係ではないと思います。件の大学生の投書は反響が大きかったのか、その後、その記事に対するさまざまな立場、年齢の読者からの意見や感想が掲載されていました。そのなかには、大学生の意見に同感だ、という中学生からのものがありました。それは「読書は試験に役に立たない。役に立つかわからない効率の悪いものに時間を削ることはない」といった内容でした。

そこに、いまの社会において支配的な、ある価値観を読み取るのは容易なことです。しかし、そうした価値観に毒されてしまっている背景には、読書によって養われる、「自分の頭で考える力」が衰えていることが大きく影響しているのではないのでしょうか。投書した大学生や中学生は、けっして特殊な人たちではないと思います。おそらく、同じような考えや感覚を持った人たちは、かなり増えているに違いありません。ですから、これは教育というレベルにまで広がる、大きな問題です。

「本なんて役に立たないから、読む必要はない」そんな考え方をする人が少なからず出てきたということは、小さい頃から遊びも勉強も習いごと、親や周りから、よかれと思って与えられた環境で育った人が多いことを表しているのだと思います。与えられたもののなかでばかり生きてると、「自分の頭で考える」ということができなくなります。自立した思考ができないから、たまたま与えられた狭い世界のなかだけで解決してしまう。読書なんてしなくていいという人たちの背景に、私はそんなことを感じます。周りから与えられた狭い世界のなかで、何に対してもすぐに実利的な結果を求める。そんな生き方は、いうまでもなく精神的に不自由です。それが不自由であることを、本人は露ほども感じていないと思うと、身震いするほど、自由の世界へと手を差し伸べたくくなります。

人は自由という価値観を求めて、長い間、闘ってきました。努力し、工夫し、発明して進歩してきた果てに、いまの自由な社会はあります。それは人類史上、かつてないほど自由度の高い環境とっていいかもしれません。

しかし「何でもあり」の世界は一見自由なようですが、自分の軸がなければ、じつはとても不自由です。それは前へ進むための羅針盤や地図がないのと同じだからです。それらがなければ、限られた狭いなかでしか動きません。

では、自分の軸を持つにはどうすればいいか？ それには本当の「知」を鍛えるしかありません。読書はそんな力を、この上なくもたらしてくれるはずです。すなわち、読書はあなたをまがいものではない、真に自由な世界へと導いてくれるものなのです。

(丹羽宇一郎『死ぬほど読書』より一部改変)

無断転載・複製を禁ず